

成寿山善光寺開創三十五周年
横浜・善光寺留学僧育英会設立二十周年
記念式典

記念講演

瑩山紹瑾禅師に学ぶ

鶴見大学教授
東京大学名誉教授

木村清孝

私どもの曹洞宗、禅宗は禅の伝統を受け継いでおります。それは、仏教学では大乘仏教という大きな枠組みの中に入ります。大乘とは大きな乗り物ということですが、それが何を意味するかというと、生きとし生けるものすべてが救われていく。すべてが悟りの安らぎへと赴くことができる、そういう教えということです。

私だけではない、あなただけではない。みんな

ながいっしょに、誰もが救われていく。安らぎへと導かれてゆく。そういう教えであることを標榜して、釈尊が亡くなられてから数百年後に新しい運動として、仏教の再生を目指して起こってきた教え、これが大乘仏教ということになります。その大乘仏教の展開の中から特に禅定、深い心の静まり、一般的な言葉を使いますと瞑想といっぺいいと思います、この心を静かに

澄ませること、そしてその中から真実の知恵が現われてくる。そういう筋道を大事にして生まれてきたのが禅の伝統です。基本的には釈尊ご自身が最終的に菩提樹のもとで静かに瞑想に入られ、座禅をなさって、悟りを開かれた、この仏教の原点をモデルにしているわけです。曹洞宗以外にも禅宗はいくつかありますが、それらすべてがそういう釈尊のありようを基本にしている、そう申し上げていいのではないかと思います。

さて、禅宗という宗派自体は千五百年ほど前にすでに中国において成立しました。曹洞宗はその流れをくんで展開してきたものですが、日本にこの宗風をしつかりと根づかされた方、日本曹洞宗の開祖に相当するのが道元禪師です。そして、その道元禪師から四代目、この禅の教えを広く、みんなのために流布されたのが、瑩山禪師です。そういうことで、釈尊と道元禪師、

および瑩山禪師。お三方を礼拝することを曹洞宗では基本にしています。

では、瑩山禪師はどういうお立場でどういうことをお広めになったのでしょうか。瑩山禪師は八歳の時に永平寺に入り、十三歳で剃髪、頭を剃って得度をなさっておられます。今でいいますと小学校を終える頃となりますでしょうか。その後、師のもとを離れて、何人もの先生方から教えを受ける、求道の旅をなさっておられます。

今は、お坊さんというのは一人の師にずっと付いてという形が一般的です。けれども、雲水という言葉がありますが、禪僧は行脚僧として、各地を自由に歩いて、これはと思う先生について勉強する。そういった体験を重ねていく中で最終的に、これでいいんだという境地を修得する。これが、禅のお坊さんの基本的な生き方なのです。このことが雲が動き水が流れる、その

ありさまと似ているものですから、雲水さんという呼び方をするわけです。こういう求道、道を求める生き方が禅宗の基本でございます。

このようなことで、たいへん若い頃、十代にすでに瑩山禪師は求道の旅をなさっておられました。寂円という禪師さんのもとで十九歳の時、一つの宗教的な深い体験をなさったといわれております。その体験とは、不死、死なないままに兜率天という弥勒様がおられる世界に昇られた。そしてそこで不退転といいますが、仏道を真直ぐ歩く、その深い確信を得られたということです。

その後も瑩山禪師は、何度も大きな体験を重ねておられます。まず、その三年後の二十二歳の時に、法華経の一節に触れて一つの体験を得られます。

先程法堂でございっしょにお参りをさせていただきましたが、その時に読まれたお経が般

若心経と、法華経の中の観世音菩薩品という一章です。ご回向の中では「大乘妙典観世音菩薩品」といわれておりましたが、大乘妙典というのは、法華経のことなのです。

さて、その法華経の法師功德品という一章に「この肉眼で、私どものお父さん、お母さんからいただいた自分の目で、三千世界を見る」という教説が出てきます。

超能力といいますが、仏教では神通力といえますけれども、それだったら全世界を見渡すこともできるでしょう。けれども、この肉眼でどうしてありとあらゆる世界を見られるのでしょうか。

この教えに触れられて、瑩山禪師はハッと気づかされたといわれます。そして、「私自身とこの世界とは決して別ではない、バラバラではない。一つなんだ」と確信されたということです。

仏教の立場で申しますと、一つの深い知恵を修

得なさったと言っていていいでしょう。

ただし、知恵は知恵のまままで終わってはなりません。一つの面として、知恵はどこまでも深まっていかなければなりません。同時に、その知恵がいわゆる慈悲、いつくしみの心、あわれみの心へと転換していく。慈悲の働きを生み出し、大きく開いていく、そういう面がなければなりません。瑩山禅師も実はその三年後、二十五歳と伝記には出てまいりますが、「大悲闡提の願」をお持ちになったといわれているんですね。これは先程の観音経、観世菩薩品の観音様のお心です。観音様が持つ大きないつくしみ、あわれみの心、瑩山禅師はこれを自らの願となさったのです。しかも、その対象は直接には一闡提です。

一闡提と申すには、分かりやすくいえば、どうしようもない人間、救われそうもない人間、仏になれない人間、そういう人たちを指す言葉

です。そういうどうしようもない人をこそ、安らぎの岸へと渡したい。こういう願いをお持ちになった、といわれております。

瑩山禅師はここにおいて、知恵と慈悲という仏教の大きな実践目標が二つともに具わったと、それを自らのものとして体得なさったと、考えてよろしいのではないのでしょうか。この大悲闡提の願いは瑩山禅師の次の世界にかける願いにつながってまいります。

瑩山禅師は最晩年に二つの願いを立てられました。それが何かと申しますと、一つは発心、菩提心を起こし続けるという願いです。すでに申し上げたように、禅師は十代、二十代の初めの頃までに何度も悟りの体験をしておられます。菩提心を起こすということは、一回、二回で終わるものではありません。本当の知恵を身につけ、衆生のすべてを安らぎへ導くということ、そのことは大乘仏教では歴劫修行と申しますが、

生まれ変わり、死に変わりしていく中で、繰り返し繰り返し、どこまでもどこまでも求め、身につけられるように努めていくものでなければなりません。

瑩山禪師は、晩年亡くなる直前に、菩提心を起こし続けて、仏の悟りを自らのものとするまで、次の世もその次の世も私は生きていくという決意を述べておられるのです。

もう一つは、女人救済の願です。いわば先の大悲闡提の願の焦点を、特に女性に合わせて表明されたものといえるでしょうか。すべての女性たちを救っていく。女の人みんなを安らぎの岸に私は導きたい。こういう願いを立てておられるのです。

もちろん男性はどうでもいいと思われたわけではないでしょう。けれども、ちょうど元の日本侵略の行動があった、時宗の時代から後、鎌倉幕府が滅亡へと向かう時代まで、その頃が瑩

山禪師が活躍なさった時代です。この間に、文化・宗教の面でも商業面でも一時的には、両国の平和な交流も行われますが、鎌倉幕府の力というものは衰えてまいりまして、日本の国内ではいろんな動揺があるわけです。決して楽な時代ではなかったろうと思われます。特に女性たちのおかれた状況というのはたいへんなものであったでしょう。

おそらく瑩山禪師はそうした条件を踏まえて女人救済の願を立てられているのではないかと。大悲の願といいますが、一般的に「みんなを救うよ」ではなく、今、特に問題なのは何なのか、そういうところをしっかり目を据えて具体的な行動をとられていると思われれるのです。

このことが、瑩山禪師のご一生を拝見しておりましたも、非常に強く感じられます。

例えば一方では、実際に仏教はどう伝わっていくのか、そのことをしっかりとお考えになっ



宋山五年秋无

ておりまして、出家、在家、両方を含めまして多くの授戒をしておられます。

また、義介禅師のもので三十二歳の時に法を継がれますが、きっかけになったには「平常心是道」という言葉だったといわれております。

この言葉自体はたいへん古いものでありまして、禅師よりも六百年程さかのぼりますのでしようか、馬祖道一禅師が最初にいわれた言葉のようです。平常心、当たり前心がそのまま道である。真実の現われであるというんですね。

普通平常心といいますが、心がまったく動じない、不動の心といえますか、落ち着いた心のことですね。ところが、もともとの平常心、仏教では『びようじょうしん』と読みますが、悲しい時に泣く、嬉しい時に笑う、そういう現実が起こる、その心を実は指しているのです。それがそのまま道の現われ、真実の現われだというのが「平常心是道」の本来の意味です。

瑩山禅師はこれをしつかりと受け止めて、仏教とはこれだということを最終的に納得されたわけです。

このように、現実の世界、今ある世界に注目し、その中で何が大事なのか、今何をすべきなのか、そういう事をしつかりと見極めて、自らの生き方、行動のありようを決めていかれたのが瑩山禅師であると私は思います。まさしく菩薩としての活動と申し上げてよいでしょう。

みなさんは観音菩薩、文殊菩薩など、菩薩と申しますと、私どもとはまったく違う優れた力を持った雲の上の人という印象をお持ちかもしれません。しかし、菩薩の本来の意味は、本当の仏の悟りを実現しよう、生きとし生けるもののために身を捧げよう、こうした決意をする人はみな菩薩なのです。

瑩山禅師は、そういう菩薩としての思いを自らの体験を通してどんどん深めていかれる。そ

して、自らも菩薩として生きようとされました。そのモデルはといえば、それは観音菩薩です。

現代においても、自らの利益、自分の我欲に動かされずに、いつでもみんなのために、生きとし生けるもののためという思いを持って活動なさる方は、立派な菩薩なのです。だから、例えばボランティア活動で、いたたまれずに何か役に立てばと飛び込んでいかれる。そういう活動をなさるとすれば、現代の菩薩の一つの姿です。私たち一人ひとりもこうした自分の狭い見、小さな利己的な心というものを離れて、できることを何かする。もし、瑩山禪師のお弟子の一人としてそれができれば、瑩山禪師も本当にお喜びでしょう。それが禪師ご自身が選ばれた曹洞禪の継承のあり方ということになるであらうと思います。黒田老師ご自身のご活動がまさにその一つですね。

できることはみんな違います。違うからこそ、

むしろ、いろいろな花が咲くのです。「錦上に花を添える」という言葉がありますが、私どものこの世界は仏の目から見れば、すでに完成された世界、何も付け加えることのない世界といわれます。その世界をさらに美しくしていこうとするあり方、そうした願いを持って生きていくこと、これが「錦上に花を添える」です。そして、そのような生き方が少しでもできることこそが、瑩山禪師の教えにつながるものとして、最も望まれていることではないかと思う次第でございます。